

2015年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	関ヶ原町立今須中学校	氏名	藤井 健太郎
-----	------------	----	--------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

中学校の社会科では、地理的分野「世界の諸地域」の学習においてガーナという国が取り上げられる。チョコレート原料となるカカオの生産や、金の採掘が行われる資源豊かな国として紹介される。そして、農業や鉱業が産業の中心であるアフリカ州の様子を理解していく。本研修を通して、日本人にも馴染み深いカカオの生産・流通過程について知るとともに、特定の輸出品目に偏った産業形態が社会生活に与える影響等について知ることができればと考えていた。この点については、カカオ農園を視察することや伊藤忠商事のガーナ事務所長の話から理解を深めることができた。また公的分野においては、日本の政府開発援助（ODA）についても学ぶ。野口記念医学研究所への視察では、顕微鏡等の研究機材が日本からの支援によって整備されていること。さらに、研究者の留学支援や東京医科歯科大学との交流事業が積極的に進められている現状を知ることができた。野口記念医学研究所は、日本の国際貢献の具体的な事例として生徒に伝えたい教材である。

2. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナの地に降り立った第一印象は、「思ったより発展している」ということだった。道路には多くの車が走り、高い建築物も見られる。人々は、スマートフォンを手に様々な通信機能を活用する。自分の中に、「アフリカ＝未発達地」という先入観があったのかもしれない。この通信機器の普及を支えているのは、電力である。ガーナの電化率は、70～80%と言われる。多くの地方都市を訪問したが、バスの車窓から見える風景の中には送電線がどこまでも続いていた。家々の屋根にはTVアンテナが立てられ、テレビもかなりの割合で普及しているように思われる。さらに、教育分野にも情報化の進展が見られ、学校ではICT教育という授業も導入されていた。交通、建築、通信など個々に見たとき、質的な面での日本との違いはあるだろうが、生活様式としては自分自身と大きく変わらないのかもしれない。また、出会うと言えば人との出会いもあった。ガーナの小中学校に行くと、大勢の子どもたちが迎えてくれた。覚えてたの日本語で歌を歌う姿は微笑ましく、温かい気持ちになった。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

「ガーナといえば、チョコレート」がすぐ連想されるほどに、チョコレートはガーナの代名詞になっている。ガーナ政府も重要な輸出品目として、チョコレートの原料となるカカオを管理する。ココボードと呼ばれる機関を中心に、農家からの買付、卸売まで流通を統制する。ちなみに、麻袋一袋（約64kg）あたり100US\$で買い付けているようだ。安定した農家の収入を確保するとともに、農業技術の指導までも行う。それこそが、ガーナ産カカオの品質が高く評価される理由である。日本の大手商社も現地事務所を構え、ガーナ産カカオの獲得を目指す。輸出する側と輸入する側と立場は異なるが、互いに共通しているのは“高品質のカカオ”である。両者の努力の延長線上に、私たちの消費生活があるのだと実感する。市場経済がグローバル化し、生産や流通過程が見えにくい社会となった。しかし、身近なチョコレートをたどっていくと、それぞれの過程で関わる人々の努力が見えてくる。カカオポッドから白い果肉を取り出し、何度も発酵を繰り返すガーナの人々の姿

が思い出される。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

野口英世は黄熱病の研究に尽力し、ガーナの地で生涯を閉じることとなった。この業績を引き継ぐ形で設立された野口記念医学研究所は、今日、西アフリカで最高水準の研究機関である。昨年、近隣国でエボラ出血熱が流行した際には、大きな役割を果たしている。この研究所内で使われる多くの実験機器は、JICA の施設設備・機材供与によるものだ。また、ガーナ人の研究者の中には日本の大学へ留学し、学位を取得した者が多い。この留学支援も JICA が担っている。日本からの様々な支援が行われてきたことで、着実に成果をもたらしている。そして、ガーナの人々の手によって研究が進められ、運営されるまでに至った。若い研究者が「ガーナから感染症を減らしたい。」と語っていたが、自国をより良い社会にしていきたいという思いが溢れる。野口英世が種を蒔き、その後の日本人の絶え間ない支援が、若いガーナ人研究者を育てたとと言ってもよいだろう。医療の現場でも地球規模での解決が求められる時代となった。日本とガーナが、協同して研究に取り組む段階へと歩み出している。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICA の国際協力事業は、資金面での援助に加え、草の根レベルでの人的支援を実施している点が評価できる。相手国からの要請にもとづくものだが、今後も継続して取り組んでほしい。今回、出会った青年海外協力隊の多くは現地の地域社会に温かく迎えられ、必要とされていたように感じた。しかし、青年海外協力隊に求められるのは現地での活動だけではなく、任期を終えて帰国してからの社会還元までである。派遣国での経験を、いかに日本社会に活かしていくかが問われている。その視点が、もっと明らかになっていくとよいと思われる。そして、もう一つは、野口記念医学研究所である。前述のように、今回の研修の中で日本の ODA による支援がもっとも成果を挙げ、かつ支援の在り方としても理想的なのではないだろうか。資金や設備等への直接的支援から、その国自身の自助努力を促す支援へと内容も変化している。ODA の具体的な事例としても、支援の在り方を考える事例としても日本に広く紹介したい施設である。自国への誇りと社会参画の意識を高めることにつながると思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1… [KEN_0280]

◇キャプション：カカオの小さな実

◇解説文：カカオは、木の幹から次々と花を咲かせる。そして実がなり、カカオを収穫する。一つの実の中には、約40～50のカカオが詰まっている。この小さな実はガーナの宝であり、人々の希望だ。“Ghana is Coco Coco is Ghana”である。



●写真2… [KEN_0129]

◇キャプション：青年海外協力隊と子どもたち

◇解説文：アカチにある Avenorpeme Zion 小学校。

緑のグラウンドが広がり、周りをとうもろこし畑に囲まれる。まるで映画「フィールド・オブ・ドリームス」を思わせる場所だ。そんな中を、女性の青年海外協力隊と子どもたちが清々しく駆けていった。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

（1）研修に臨むにあたって

わたしは、社会科の教師として自らの研究テーマをもち、日々実践に取り組んでいる。そして、そのテーマと関連できるよう研修に臨んだ。この研修では見るものすべてが新鮮であり、得る情報も多い。情報過多で混乱しないためにも、目的意識と研修後の授業実践の青写真を描いておく必要がある。逆に、授業実践のことを頭の隅に置いて臨むことで、それに応じた情報が自然と集まってくる。

（2）研修での学びについて

（1）の内容とも関わるが、目的意識がはっきりしていると学びは深まる。わたしの場合、社会科の学習で ODA について教える。しかし、知らないことも多い。今回、野口記念医学研究所や国道 8 号線など、ODA が投じられている現場を初めて見学した。“百聞は一見にしかず”だと改めて感じる。また毎日、就寝前にそれぞれの訪問地に立ち、自らが感じたことなどを 400 字程度で書き留めておいた。13 日間と期間が長いこともあり、忘れないためにも必要だと思う。そのときの驚きや気付きは、授業実践にも活かされる。

（3）防蚊対策について

日本から約 20 時間のフライトを経て、ようやくガーナの地に降り立ったときは、感慨深いものがあった。しかし、それも束の間、蚊の心配が頭をよぎる。今回、持参したのは日本で購入した市販の蚊よけスプレーのみであった。他の参加者は、様々な防蚊グッズを持参していたようだが、個人的には毎朝スプレーを噴霧しただけである。個人の捉え方にもよるだろうが、わたしがガーナ到着時に心配したほどのことはなかった。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今回、現地の小学校を 2 校訪問した。現地校の事情もあるだろうが、授業を参観することや校舎内をじっくりと見て回る時間があるとよかった。2 校とも日本文化の紹介と交流に、多くの時間が割かれていた。わたしは、日本の学校を訪問するとき、その学校独自の雰囲気を楽しみにする。学校の文化といってもよい。しかし、そうした学校文化を感じられなかったことは、残念である。最後に、JICA 関係者をはじめ NIED の方々の手厚いご支援を受け、すばらしい研修ができたことに感謝申し上げたい。ありがとうございました。 以上